

成城大学 『経済研究』 第 251 号抜刷（2025 年 12 月）

エッセイ

リュトブフ 貧困と宣伝と

岩 本 修 己

リュトブフ 貧困と宣伝と

岩 本 修 己

明日は良いことあるかも l'esperance de l'andemain,

と思えばうれしくなるぜ Si sunt mes festes.

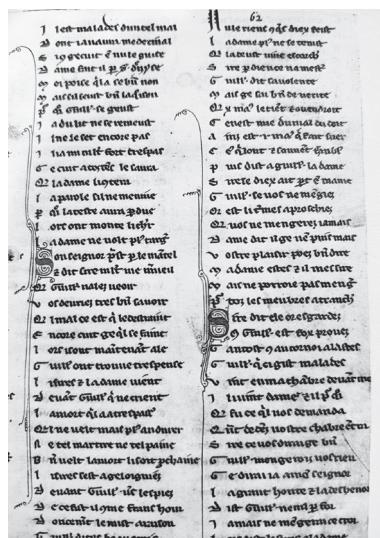
「リュトブフの結婚」『Le mariage de Rutebeuf』114-115 行

1. 手がかり

リュトブフって誰だろう？ 56編の詩（約14000行）を後世に残して、19世紀に発見されるまで13世紀末以降消息が絶えた詩人。その手がかりになるのは、AからSまでの12の筆写本。その他T写本もあったが、火事で20世紀初頭に消失してしまった。

残ったもの多くは、パリの国立図書館が所蔵しており手に取って見ることが可能だ。写本の外観、手触り、匂い等は実物でしか味わえない。

これらの写本から、リュトブフの



当時の写本（図1）

作品だけを抽出して、全集、なり、作品集又は一作のみの単行本の形にされたものはそれほど多くない。一方、どの写本を取っても、リュトブフの作品だけで埋められているものではなく、写本の一部に痕跡を残している、という表現があたっているほうが多い。全集本の中で常備すべきは、ファラルーバスタン版とザンク版の両書である。ファラルーバスタン版によってリュトブフを知った筆者の学生時代から30年後に登場したザンクは、デュフェイの仮説を採用して文字通り「横のものを縦に」置き換えた画期的な編集を提示した。ファラルーバスタンが、作品をジャンル別に配列していたのをザンクは、制作年代順に置き換えたのである。C写本を底本に選びこの配列を極力尊重したとも言える。ザンクによって読者は、リュトブフの軌跡をより正確な年代順に辿ることができるようになった。

海外研修中にザンク本の出版に立ち会った筆者は狂喜した。だが、すぐに失望したものだ。ザンクは、現代語対訳を付けることによって古フランス語の壁を取り払った。多くの疑問に答えてくれたザンクは、私の専門分野としていた研究の炎を吹き消してしまった。失意の空白の時間を経て、（少数のフランス中世文学研究者を除く）すべての日本人に向けて筆者にできることを思いついた。それが本稿である。

ファラルーバスタン FARAL E. & BASTIN J. *Oeuvres complètes de Rutebeuf*,
Picard 1959-1960

ザンク ZINK M. *Oeuvres complètes de Rutebeuf*,
Bordas,1989 (現代仏語対訳付き)

JUBINAL A. *Oeuvres complètes de Rutebeuf*, 1839 (先行の全集版本)

デュフェイ Dufeil M.-M., *L'œuvre d'une vie rythmée :chronographie de,*
Rutebeuf in *Actes du Colloque d'Amiens*, 1980

HÜE D.& GALLÉ H. *Rutebeuf*, Édition Atlande 2006 (諸研究のまとめ)

筆者（リュトブフ分）

「リュトブフの貧乏について」『成城大学経済学部創立30周年記念論文集』1980

「薬草売りの口上」『成城大学経済研究 第79号』1982

リュトブフ 貧困と宣伝と

「リュトブフのドゥニーズ坊のこと」『東京大学仏文学研究』1990

「リュトブフ」など〔項目執筆〕『世界文学事典』集英社 2003

「リュトブフ」〔項目執筆〕『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社 2007

☆図1 Edmond Faral 監修「LE MANUSCRIT 19152 DU FONDS FRANÇAIS DE LA BIBLIOTHÈQUE NATIONALE の写真版」1937, Paris Droz より

2. パリに出るまで

生地は不詳だが、上京以前は、シャンパニュの町トロワに居たと推測される。最も年代の早い作品が、この町のフランシスコ修道会を題材にしているからだ。1249年に城内に拠点を得たい新興の修道会とそれを阻止しようとする既存の教会との争いに時の教皇が介入した事件を取材したものである。後の作者の態度とは180度違い、修道会側に与する論調が鮮明である。駆け出し当時と、その後の態度が変化したとしても不思議ではない。この地で書かれたと思しき作品はこれ以外には糞尿譚一編だけだが、シャンパニュとリュトブフの縁は切れていない。香具師の口上を模写した「薬草売りの口上」には、地方色が濃く滲みでている。シリアのフランク人領を守備していたジョフロア・ドゥ・セルジーヌの孤軍奮闘振りを称える詩を作っているが、ジョフロアもこの地方の人。シャンパニュはオーセールの参事会員の注文に応じて書かれた「聖女エリザベト伝」もある。

3. パリでの戦い

だが、リュトブフは何処よりもパリの詩人である。世紀前半のアルビジョワ十字軍を経て漸く中身も伴った六角形になったフランス王国の、首都パリである。聖人にまで祀り上げられたルイ九世の治下、パリのノートルダム司教座教会初め建築ラッシュの都市には、多くの地方民が雪崩込んで来ていた。世紀半ばのその活況は、「グレーブ広場人足のディ」にも垣間見える。彼自身の名前 Rutebeuf<rude boeuf (ごつい雄牛) からして、ひ

弱なインテリとは思えないが、肉体労働よりも頭で勝負する方だった。韻を踏む能力には人一倍秀でていた彼は、稼ぎがどうであれ、詩作をもって生業としていた。彼には、注文を出して詩作させるパトロンがいた。

上京したリュトブフが生活していたのは、パリ大学の近くであったと想像される。どう見ても現役の学僧又は学僧上がりの彼の落ち着き先は、大学の周辺しかない。上京直後の彼を待ち受けていたのは、何だったろう。首都の活況と混乱、富めるものと貧しいものの如何ともし難い格差…リュトブフは、大学周辺で必死にパトロンを探す。その中で目立つ集団があった。ローマ教皇直属の新興二修道会は、教区を持たず従って領地からの上がりで生活する既存の教会人とは異なり肉体労働と托鉢をもって生活する筈であった。フランシスコ会士 Frères Mineurs、ドミニコ会士 Frères Prêcheurs は、急速に勢力を拡大して殊に後者は、パリ大学の隣に拠点を構えた。ドミニコ会の別名 Jacobins ジャコバンは、今でもパリを南北に縦断する大通りにその名を残している。（サンジャック通）1217年に両修道会は、パリに修道院を得たが、間もなく説教師養成のための神学校を開設する。その人気は、大学人を魅惑するに足るもので、在俗教授（非修道僧）の中にはそこで喜んで教授するものも現れた。やがて、この学校で育った神学者がパリ大教授に取って代わる。次は、本山パリ大学にフランシスコ会が講座を開く。1229-1231のパリ大学と王権の対立の折りも独自の立場を守ってストライキに参加せず、結果的には自己の領分を広げる。更に1252年にはドミニコ会も外国人教授に充てられている講座を要求している。（この講座は、ドミニコ会のトマス・アクィナスが担当するこ



筆者作：サンルイ島周辺図

となる）。腐敗しかけた既存の教会に対し、信仰と清貧に生きるフランシスコ会、教皇の尖兵としてアルビジョワ十字軍でも異端撲滅に名を馳せ理論武装では他を寄せ付けない実力を備えたドミニコ会が、パリ大学に着々と地歩を築いていく。在俗教授団にとって講座を巡っての脅威が増大する。教皇とフランス王の保護を受け、実力もある両修道会に対する在俗教授団という構図では、前者に勝ち目があるのは誰の目にも明らかだった。しかし、戦いを仕掛けたのは在俗教授団のリーダー格ギヨーム（Guillaume de Saint-Amour）のほうであった。一フランシスコ会士の論文に異端の教義有り、と看破し『当代の災禍について』を表して修道会の反カトリック要素を糾弾したのである。ローマに赴いての訴えに対し、時の教皇は糾弾の趣旨を認めてギヨーム側に軍配を上げる。所が、教皇の裁定は大学問題にはノーコメントなのだ。更にこの次の教皇の代になると裁定そのものまで覆ってしまい、更に大学の講座問題に関して托鉢修道会に有利な判断を示したのである。追い討ちをかけるように、ギヨームらは、破門されてしまう。新教皇はフランシスコ会に取り分けて好意的な人物だったのだ。これで万事休す。

この間、我らのリュトブルは別の見方をしていた。「正しい生活、信仰、平安、協調を口にしながら、彼らのやり口を見ていると、言うこととやることにはエライ距離があるものだ。」「ドミニコ会士をまつとうな人たちと信じたいけれど、彼らがローマに反大学を論じていることを見れば、とても信じられない。」リュトブルは、この詩句を含む『ドミニコ会と大学の不和』を始め、『偽善について』、『ギヨーム先生のディ』『ギヨーム先生哀歌』など1261年頃まで次々とギヨーム擁護と托鉢修道会批判の論陣を繰り広げてゆく。彼らが清貧だって、冗談じゃない。口先ばっかりの説教坊主なんて聞く耳持てぬ。それに比べりゃギヨーム様の方が余程しっくり来る。リュトブルのパトロンは、ギヨームをリーダーに戴いていたパリ大学在俗教授団のシンパと想像される。リュトブルの事件に対する反応は、か

なり迅速だ。しかし少し身を引いて大局から見れば、その反撃は何という無駄骨だったことか。本人は、それでも只管敗者を賞賛し、擁護し続ける。彼の気持ちはこの紛争によって昂揚していた、と思われる。托鉢修道会を切って棄て、返す刀で他の修道会も打ちのめす。

4. 戦い終わって

ギヨームと托鉢修道会の争いが圧倒的な後者の勝利で終息する頃、昂揚していた詩人は、失望に捕らわれつつも燐る情念を後世代表作と賞される数編の製作に向けた。「夏には黒い蚊に刺され、冬には白い蚊に（雪のこと）」「サイコロは、身包み剥いでいった、サイコロは、私を苦しめ、…」『冬のグリエーシュ（サイコロ賭博の一種）』賭博者のなれの果ては、『夏のグリエーシュ』でも繰り返される。ならず者に対する嘲笑は、やがて自分自身へと向かう。「裏切られる心配は無用… トロイの破壊も私の破壊に比べればどれほどのものか… 若くも別嬪でもない女…」との結婚を語る『リュトブフの結婚』そして「妻は子供を産んだ、馬は足を折った… 乳母は金をせびり、怒鳴り喚きに来ると言って脅す… 家主は家賃を払えと言うけれど無い袖は振れません… 身近に居た友たちは、仲良くしてたのに、一体何処へ行ってしまったのか… たったの一人も居やしない… 風が戸口に吹いてきて奴らを綺麗に吹き払った…』『リュトブフの哀歌』。近くに居てあれ程大事にしていた友だちは、何処に行ってしまったのか？『リュトブフの貧乏』「頼まれて他人の悪口を歌ってきた… もう賭けを下りた」『リュトブフの悔恨』同じ頃の『逆向きルナール』は、貧困の元凶としてルイ九世⁺を当てこする。文字通り聖人君子然としたこの王は、歌舞音曲を嫌い、ジョングルールに門戸を閉ざしたのであった。パリ大学紛争に於いても王は、リュトブフの敵側だった。恨みは深い。非難的は、常にケチなこと。

◆余談 太陽王ルイ14世の先祖。1226年に即位。異端の勢力及び大諸侯を破ったアルビジョワ十字軍は、摂政の母が指揮したが。第7回と第8回と2度の十字軍では、先頭に立った。顕著な信仰を讃えられて（聖王ルイ）と称された。フランス語ではサンルイだが英語ではセントルイスになる。現在はミズーリー州のここに18世紀フランス商人が毛皮取引所を設立し、地の利を得て現代にいたるまで繁栄している。ルイは、第7回では捕虜になって多額の身代金を支払い、第8回ではパレスチナに到着する前に1270年チュニスで病死してしまった。こんなダメな王様を1297年列聖したのがローマ教皇ボニファチウス8世である。『何だと？女（複数）や男（複数）と寐ることなんか右手と左手で手揉みをすることと同じようなもんだ。それだけのことだ。何が不道徳なものか！』（堀田善衛「ある法王の生涯」p.88）などと宣う破天荒、傍若無人な人物、ルネッサンスのドナルド・特朗普。当時のフランス王と分捕り金の取引をしたような男なのだ。

その後

貧困を主題にした品群は実は、全体の中では、多数派ではない。にも拘らずリュトブフと言えばほとんど必ずこの作品群を念頭において、語られる。うっかり『リュトブフの悔恨』中の言葉を信じたりしてはいけない。リュトブフの詩人稼業は終わるどころか後半戦へと進む。これまでの制作によって認められた詩人に、より多くの注文が舞い込むようになる。リュトブフの作品は、これらのパトロン達の意向が色濃く反映されている。1262年制作と推定される『コンスタンチノープル哀歌』を皮切りに教皇が提唱しルイ九世が諸侯を集めて出発した十字軍へのアジテーションを次々と制作する。

更に罪を犯した後悔い改める二人を描く二作。『エジプトの聖女マリア伝』と『テオフィルの奇跡劇』

リュトブフは、翻訳困難な作者である。あらゆる翻訳につきものの問題に加えて、彼が駄洒落や類似音のもてあそびに熱心であればあるほど、その部分を日本語に移せる可能性はどんどん遠ざかっていく。

リュトブフの心はどこにあったのか。時にはパトロンにもなる王侯貴族との埋められることのない身分格差。肉体労働ではなく頭脳弁舌で勝負する似た者同士であっても 決して勝てない托鉢修道会に対する敵意。逃れられない貧窮の日常を凌ぐ手段はプロパガンダの製作しかなかった。リュトブフは恋愛詩を書かなかった。「リュトブフの結婚」のように裏返して反恋愛詩にしてしまったのだ。逞しく 悲しい。

5. 翻訳

『リュトブフの結婚』 Le mariage de Rutebeuf

受難された方の受肉の年、お誕生日の一週間前、木には葉がなく、鳥は歌わない 60
(1260) 年に、全身全霊で私を愛している人＝私を不幸にしてしまった。

馬鹿まで私をバカにする。万策尽きた私は人生の機織りをするしかないのだ。

1.9行)

する事がある。神様は私を卑しい心にはされなかつた。この方に苦しみを忍ばせたというのに、この方の苦しみを脇に見て私の苦しみをご覧になり、心から「お前はお終いだ」という叫びをこの方にこの方に言わせないように。 10-16行)

十字軍に参加するといつても、俺の苦労に比べれば大したことはない。苦痛だ！逆らえない！馬鹿はバカラしくしないと時間の無駄だ、と言われるが、家も屋根も持たない俺だけれど、だからといって結婚しない理由になっただろうか。それどころではない、俺を死ぬほど憎んでいる輩を 安心させることになったが、俺以外の誰一人好きにもならず、気にも掛けない女と結婚した。彼女は当時貧しく困窮していた。何とも素敵な結婚だ！俺も今では彼女同様に貧しく困窮している。彼女は若くもなく別嬪でもない。花籠入りのアラフィフ、瘦せぎす且つ干からびてもいる、裏切られる恐はない。マリア様の御子が 馬槽でお生まれになってから、こんな婚礼は見たことがない！俺はコチコチの阿呆だぜ。する事なすことがその証。

17-43行)

リュトブフは、身を包み守ることを知らないと云われることだろう。野暮な仕事ぶりだから。自分の服も儘ならぬのだから、そう言われても仕方ないだろう。友達皆に知らせるぞ。彼らが喜ぶように、とことん楽しめるように、このニュースを広めてくれる者たちに、ケチするんじゃない。 44-52行)

俺はもう税務署も警察も怖くない。神様は遠くから 俺を見守って下さると思う。こうして困っている俺は神様を見た。ハンマーで部屋の隅をぶち壊されているのだ。

そんなこんなは神様のせい。俺は敵を喜ばせ、味方を苦しめている。これが本当のところ！俺が神様を怒らせてしまったので 俺を揶揄い、馬鹿にしている。神様は仕返し上手。下着がないから、ゴワゴワの服を直に着るザマ。俺から、親戚でも他人でも物を盗まれることは、まるっきり心配要らない。家には一本の櫻も、貸しもない カラツボプラなのさ。もういいだろう？家に在る壺は粉々だ 美しい日々は過ぎ去った。

53-72 行)

その日々を何と言ひ表せばいいのか。トロイの廃墟すら 俺の滅亡とは比較にならない。もっとある。アベマリアへの我が信心にかけて 死人が出たといって祈る人が居れば それは おいらが死人だよ。苦しい！なのに、どうすることもできない。四月、五月が来る前に 四旬節が来やがる。言わせてもらうと 妻は 魚もポタージュスープも召し上がる。自分の魂の救いを祈る暇はたっぷり 愛しいマリアさまのためなら断食する暇もある 早寝を決め込むのは 満腹していないから。これは確か。堪忍袋は持っている。見たところ 妻のできるたった一つの蓄えだ。

73-94 行)

我ら全員の先達たる主にかけて言うが、娶った時、俺の持ち物はごく僅かだったが妻のほうがもっと少なかった。おまけに俺は体を使った稼ぎができなかつた。俺の貧乏のせいで 何処に住んでいるか誰にも分からぬだろ。我が家ドアを叩く人など居ない 無人だからな。見捨てられ、貧乏だから。パンもパスタも無いのが当たり前。グズグズして 俺の帰宅が遅いのを非難しないで。誰にも歓迎されない。手ぶらで帰ると 帰宅は喜ばれない。土産を持たずに 戸口を跨げないのが 一番辛い。

95-112 行)

この難局をどうやって切り抜けるか、ご存知でしょうか？明日になれば、何か良いこと有るかも、と思えば嬉しくなるぜ！俺は坊主だと勘違いされる。俺に向かって皆さんに十字を切らせるからな。冗談は言ってない。俺が福音書を読んでいてもだ。俺の呆れる話を聞いて、皆が町中で十字を切るわけさ。この話は、二度と繰り返さないから、本当の所、通夜に話すのが正解さ。明らかなことは、俺が盲だつたって事。神様だつて、これほどの目にあった 連れの弟子は居なかつた。神への愛ゆえに、火あぶりされ、石で打ち殺され、八つ裂きにされたが、その拷問は、すぐに終わったと 俺は信じて疑わない。それに引き換え、俺の受けた拷問は 休みなしに一生続くのだ。神様 お願ひだ。この苦しみ、この惨めさ、この愚かさを神様の愛に適う 賞罪の聖なる苦行と置き換えて下さいまし！

113-138 行)

(筆者訳)